

## 研究発表会実行委員会の発足について



東京理科大学 教授  
鈴木 知道

学会の重要行事として、研究発表会がある。毎年、本部、中部支部、関西支部主催の研究発表会が各1回、そして、年次大会での研究発表会と計4回の研究発表会が開催されている。年次大会のホスト役は本部、中部支部、関西支部の持ち回りで行っているが、年次大会での発表会は本部が多くを担っている。本部が担当する場合は、これまでは事業広報委員会と事務局がその運営を担当していた。昨年12月の理事会で、研究発表会の運営や実行を担当とする委員会として、研究発表会実行委員会（のための特別委員会）が立ち上がることが承認された。現在、筆者が担当しているが、その経緯などについて述べさせていただく。

発足の背景には様々な要因があるが、今後の学会業務の継続的な効率化を品質管理学会の有志で議論したことがきっかけである。これまでの学会の運営は事務局に依存していた部分がかかなり大きく、学会の事務局が過渡期の今、自然と話題がその話になった。そこで誰からともなく、実行委員会を作ってはどうかという流れになった。

実行委員会を立ち上げる狙いはいくつかあった。まずは事務局業務のうち、見えにくかった業務を明文化し、委員会で行う方がよい事業について、委員会で行うことである。業務のみえる化と事務局業務の軽減の両方が実現できることになる。そして、学会運営で貢献している方々に対して少しでも報いることである。例えば、研究発表会のプログラム作成は事務局から個別に依頼されて行われているが、だれの目にも触れないまま行われている。また、研究発表会当日の裏方役、手弁当で手伝っていただき、

さらには参加費も支払っていただいているが、これも公表などはされていない。報いるといっても、委員会の委員を公表する形ぐらいしかとれないが、ボランティアの方々の実績を少しでも残したいという気持ちである。これまでは空白ページであった、研究発表会の裏表紙の裏のページには、本年5月の研究発表会から、実行委員会とプログラム委員会の委員一覧を掲載している。

実行委員会特別委員会の第1回は今年の2月に開催された。委員会のメンバーは、研究発表会や行事に詳しく経験のある産・学の委員と、発表会座長等の若手の学の委員から選び、業務を的確に遂行していくとともに、若手の育成も目指した。第1回委員会で議論し実行委員会の組織や役割について整理した。特別委員会は親委員会として機能させることとし、研究発表会ごとに実行委員会、プログラム委員会、優秀発表賞選考委員会（この委員会はすでに数年前から毎回設置されている）を設置し、またそれぞれの委員長を推薦・指名することに決定した。実行委員会は、研究発表会の運営および実行を行う。チュートリアルセッションの企画等も行う。プログラム委員会は、プログラムの作成および座長の推薦を行う。プログラムの作成は、近年は、優秀発表賞の審査も考慮しなければいけないため、やや複雑になっていることにも対応していただく。実際の運営方法については、研究発表会を積み重ねて、整備・改善していく。そして、将来的には、特別セッションや、新しい取り組みにも挑戦していき、より魅力のある研究発表会にしていきたい。